



技桑抄集
十一

伊地知文庫
文庫20
360
13



目録

技業拾葉集卷上

目録

水女百番歌合初判序

後鳥羽天皇

遠鴻街歌合序

同

新古今和歌集跋

同

鴻之川御文

同

顯注密勅跋

藤原定家

文河弄合跋

同

嘉禎御中書御文

同

長編百首のくくよ志取支序

和歌初抄序

同 同

くのとよ（注）くきく文

裁初禪尾

東関紀行

源親行

芥柯序

源通光

七十番歌合跋

藤原光俊

弘長歌合序

藤原為家

寶治歌合跋

同

古今著聞集跋

楊成季

六

りし先ト母にすり

遠鴻御飲合序

同

とを飲と判さるは道に執るゆゑなりと
撰く。新撰のりしりしは分ら。とらひの海の島に
ありと定まら。花の都の昔。わりの子二十一字の
とはははははははははは。桑の門の今。三輩九品の伴
とあり。御酒のまじり。高の緒河の流とらひ。年が。和
飲の浦とらひと隔て。十年のまじり。六年のまじり。と
りま。文の母道と。とらひのまじり。後症
宗隆の和歌あり。新古今の撰者也。八十餘の命

の病。いま。いり。一。路。の。ま。ま。清。を。と。ぬ。福。也。か。れ。は。し
ら。ん。今。一。交。思。の。あ。ま。し。と。あ。ま。し。い。ま。わ。り。の
と。し。と。あ。ま。し。と。思。ふ。是。よ。ら。ぬ。一。片。の。ま。ま。一
乃。あ。ま。し。と。あ。ま。し。と。思。ふ。是。よ。ら。ぬ。一。片。の。ま。ま。一
先。一。何。り。あ。ま。し。と。思。ふ。是。よ。ら。ぬ。一。片。の。ま。ま。一
か。れ。は。し。い。ま。の。あ。ま。し。と。思。ふ。是。よ。ら。ぬ。一。片。の。ま。ま。一
か。れ。は。し。い。ま。の。あ。ま。し。と。思。ふ。是。よ。ら。ぬ。一。片。の。ま。ま。一
亭。輝。多。り。い。ま。の。あ。ま。し。と。思。ふ。是。よ。ら。ぬ。一。片。の。ま。ま。一
く。乃。あ。ま。し。と。思。ふ。是。よ。ら。ぬ。一。片。の。ま。ま。一
あ。ま。し。と。思。ふ。是。よ。ら。ぬ。一。片。の。ま。ま。一
あ。ま。し。と。思。ふ。是。よ。ら。ぬ。一。片。の。ま。ま。一

Handwritten text in Arabic script, right page. The text is written in a cursive style and appears to be a continuation of a letter or a document. It contains several lines of text, with some words being more prominent than others. The ink is dark and the paper shows signs of age.

Handwritten text in Arabic script, left page. The text is written in a cursive style and appears to be a continuation of a letter or a document. It contains several lines of text, with some words being more prominent than others. The ink is dark and the paper shows signs of age.

はかして

あつらふに秋の空の中を
かゝる様子の月夜に

かた川の末着の前と
里と町とは
河と海とは
かゝる様子の月夜に

花のぬ色香し
つゝ片らめど

尾張由起田の言に

やそ糸つて
木綿四季風
もる中
栞
物
有人
宮造
す
も
神

歸り給へ時・尊の白鳥と仰て去りし・叙は徳田と云ふ
終りしより・二條院の所時大江匡衡と云々・竹生河原より
長保のとき・河原にて・向ふの舟をとりし・るに大般
若と書て・所言を伏書と云ふ・其文は・吾能はよみぬ
任取又みらぬ・古くは海人とす・駒のふくむ
と書し・るを・後よりみせし・る

思ひ出のつとや人かかりし

法りかゝるはばもむきとす

二礼言はま出浪浪よおそい・徳有明の月夜も
友かゝる鳥と云ふ・と云はれわらむ・後のをたし
う浪よ浪し・る表かゝる

故郷は思ひし遠くをみ

あゝ夜つらに二村よあまて

あゝ夜つらに二村よあまて・山中の女
色くあやむ・未測の志を海の色と云ふ
わらわら・波に寄る・るを・る
見れば

あゝ思ひし遠くをみ

あゝ思ひし遠くをみ

あゝ思ひし遠くをみ・在原業平杜若
のあやむ・るを・るを・るを
あゝ思ひし遠くをみ・るを・るを

きこひまき・夜もあけ・床の下は晴天とすゝ思ひぬら
お寐しぬら〜ももふら〜たか〜

この葉の海にわたる朝陽と

月の如く〜の〜海に〜見〜

若葉にわ〜わ〜わ〜から・沙を〜お打出て彩色の霞よ・露
坂の原し云布よ来よきよ水南の沙よ〜は〜よ〜西
海の諸道〜・露花繡糸れぬ〜い〜有〜女を〜白〜
馬舛の女何〜雪は積もる〜母〜其〜松〜
生わ〜也〜指風指よき伝文の〜の葉の唐布〜及布
漢人の客舟の舟に栖よや若葉・来遠の野原の舟に〜
〜と涙の舟よ〜〜ら〜は〜旅人のか〜と泣け〜

河の底〜と〜志〜と〜け〜木像の觀者沙石の河童前也
折られわ〜・こやか〜とあめ〜葉の唐布〜ら〜雨〜と
も〜ん〜月と送る霞〜と〜望〜と〜河〜鐘舎
〜・鏡曇人かり〜・け觀者の海まよゆ〜
〜け中まは〜と〜ぬ〜い〜・河を〜津〜
分り〜ら〜と〜鐘舎と〜鐘舎と〜
よ〜り〜河童と造〜と〜人〜由〜
中敷を〜の河童〜系〜下敷唐の桐風は渡ら
お萱〜・わ〜の葉の霞と鮮よ見よ・那書〜たか〜の
くぬ帳の紐よ清いつよもぬか・弘誓のゆ〜を海り
〜と〜たか〜

粧をいかに入はるもなほ女と見ゆ
ゆるに去るのりつとせばあき

天流と名をいふわたり有川原の流氷をきく見ゆ
秋の水漲りきて舟のたを速く流氷に渡りて人
いふ人の春もあはれかきしは河津浦の舟
かきし人の流氷をいふはかきしは河津浦の舟
あはれと名をいふはかきしは河津浦の舟
うたをいふはかきしは河津浦の舟
流氷をいふはかきしは河津浦の舟
あはれと名をいふはかきしは河津浦の舟

この河津の流氷と女の中は

人の流氷のあはれと見ゆ

遠江の風府の海の浦のあはれと見ゆ
ゆきとあはれと見ゆ
有る海見のあはれと見ゆ
南の極浦の波袖と見ゆ
まはれと見ゆ
目もあはれと見ゆ
あはれと見ゆ

波の岸松のあはれと見ゆ

このあはれと見ゆ

このあはれと見ゆ

たゆむの擧りり。人よるぬれし権原、墓とかんこしぬ。
道のわたりし土とありき。みゆのり。變基半納言
乃口もみ路りきん。年よ春の草乃こしきこしき。
詩思のゆりて。そしきし物に比せしむかた。若しふ
殊ししわりのわりの。羊舌傳法わんげつの何れ。
旅人のまよし。海やかきとらん。彼権原かたの二代將軍いせえんの恩よ
帰る。武勇三畧の若とわらう。かこしらよ。人かきとみき。
如何ある。りき。有きん。かこし。の續もく。こし。忽よ。才と
士き。こし。ありき。かこし。の思ん。や。思ひきん。都
乃し。馳上まけ。程よ。彼何國。さふ。と云。下よ。こし。川
き。こし。決。ら。ま。有き。ら。を。表よ。思ひ。食せらる。

漢波の法皇配下(卦むを給ひて。彼表たると云。下よ。こし。川
き。を。海。産。し。き。は。法。を。西。行。彼。行。の。は。お。て。み。ま。し。其。
ら。や。若。む。し。の。金。の。本。を。こ。か。ら。ん。存。何。か。ら。ん。
と。あ。り。き。の。か。し。け。給。り。ま。い。海。で。志。し。き。な。り。
その。ひ。の。り。ま。及。後。し。ら。し。し。思。ひ。ま。い。を。
表よ。き。の。

何れし。ま。ま。か。れ。玉。降。り
な。ら。の。り。し。さ。と。め。き。
清見。美。し。色。く。て。須。更。出。し。ハ。津。乃。石。り。終。了
よ。ら。し。て。波。よ。囀。の。故。の。権。原。さ。ら。海。く。風。は。れ。を。た。て
體。も。あ。い。ま。ら。未。後。の。思。ひ。せ。し。か。ら。ぬ。さ。わ。ら。り。

たゞあゝとて一孤鴻の眼を磨るが如し。わのうも遠帆の
をよほしつゝあはれとて思ふ。け方彼方の眺をいひしとて
つらき。一舟もけは接尾の艦も。まわるとて浦丸
松の栂もわきぬ。以原昔の海の上よりかいて蓬萊の音
島のこゝろよわらけり。まきうし。浮島しめん岩舟もいし
字もいとのうらう神仏のまきうもやわらんと。いしとて
やういし見也

氣印した波の入はまらゆの根の
きつうし雲し浮島しうらう
形てい舟もつゝとてお舟の松原しとてあはれ。海の清
遠くは松もるも生わらとて。みうの信もらとて。

沖も舟もしゆらかひと。木の葉のまきうもいし見也。
破子孫の松の下双峯寺一葉の舟の中万里所へく
ゆるも波もまきうら。眺をいひしとてはまきう。

みしとてはあがの松の末とて舟
見しとてはけしとて波のまきう。
車返しとてはまきう。或葉もいしとて。烟はまき
いしとてはまきう。夜のまきう。彼縛戎人の夜まき
張麻しかやうらとておあを

いしとてはまきう。神もまきう。

二献又郭曲河字・其のこら教献と名・を其夜集
河字のんりして今・其とあり・今年年収拾の功状
遂し二献竟宴の故とらん・其の律を河字の
中く不あり

扶桑拾葉集卷第十終

